明日の大学のために

Pour le fuur de l'université

照木　健

桐蔭横浜大学法学部

2008年9月15日　受理

桐蔭横浜大学が創設されて20年になる。この機会に発刊された大学新聞の創刊号で、小島学長は「これまでの教育を細部から根幹に至るまで網羅的に見直し、全体として自らのルネッサンスを生み出すことで新境地を拓こう」、そのために「一つ一つ具体的にツールを考案し、これを非凡な形で活かしていきたい」と呼びかけられている。私は法学部発足以来大学に加わり教授としてまた学生部長としてその発展に参画してきたが、諸計画のうち実現したものもあるが、まだ日の目を見ないものもあり、状勢の変化によって新たに設けてはどうかと思われることもあり、学長の呼びかけに応じて網羅的且つ具体的に考えを述べてみたい。

折しも中央教育審議会は大学生が在学中に獲得する学習成果を「学士力」と定め、4分野13項目にわたるその内容を文部科学省に答申する予定と聞く。4分野は◇知識・理解◇汎用的技能◇態度・志向性◇総合的な学習経験と創造的思考力からなり、13項目は「多文化・異文化に関する知識の理解」などから「コミュニケーションスキル（日本語や外国語で読み書きや会話をする技術）」「情報リテラシー（多様な情報を収集・分析する能力）」「市民として社会的責任」など、一部報道された内容を見ても大学が早急な対応を迫られるものと思われる。

そこで大学の各学部各学科ごとに異なる専門科目を別として、全学学生に共通のカリキュラムや授業以外の学生の生活に係わる活動、それらを支える大学のあり方について私見を述べ、桐蔭ルネッサンスに一斑を加えたい。

大学はその機能を果たすために5つの部門に分かれて仕事をしている。

1）管理運営部門
2）教育研究部門
3）学生の生活指導部門
4）卒業後の支援の部門
5）学生の受け入れを担当する部門

などである。以下順に考えを述べる。

1）管理運営部門

私の携わるところでないが、図書館と新建築棟に関しては若干意見がある。

図書館は「知」の蓄積の場であるとともに、

Takeshi Teruki : Faculty of Law, Toin University of Yokohama, 1614 Kurogane, Aobaku, Yokohama 225-8502

「知」の拠点として利用しやすい施設としての機能を果たさなければならない。しかし現在の大学図書館は2つの面で問題がある。第1は、利用しようとするものが、図書館に入って館員のサービスを受けにくい状況である。私自身がカウンターで館員にある依頼をしようとした時に、声が大きいと注意を受けた。私は大声を出したわけではなく、小声で話しかけたのだが、ひそひそ声でなかったのがいけなかったらしい。それは受験勉強に利用する高校生の苦情を恐れてのことらしい。しかしここは大学の図書館であり、図書館の図書を利用するのでもなく単に勉強室に使おうという者の為に本来の利用者が制限を受けるのは本末転倒であり、高校生の勉強室が必要ならばそれは高校棟に別に設けるべきであろう。図書館が静穏な雰囲気を保つのは当然であるが、現状では学生が利用しにくいというのももっともである。

第2は図書の貸し出しによる館外利用の問題である。私の場合で言えば論文を書くのに利用したいと思って尋ねたところ、非常勤講師の場合1冊1週間のみと言われて利用を諦めた。専任教員でも10冊3ケ月で、ある方は返却日が夏休みの閉鎖期間にかかって返却が遅れたために3月まで貸し出し停止になったという。一般の市立、町立図書館でも10冊まで2週間～3週間で延長も認めるというのに、研究のために図書の館外での利用は認めないというのに等しい扱いである。他の大学では専任講師には100冊1年というやり方もあると聞く。

二十数年も前のことだが、関西に竣工したばかりの京都産業大学の図書館と関西大学図書館を訪ねたことがある。新しい理念のもとにつくられた諸設備は旧来の図書館を抜け出たものと感心した。窓際の1人席（昔のように向かい合わせの席だけでなくいろいろなところに気分に応じて使える席がある）で本に読み耽っている学生や、4、5人でグループ室の丸テーブルに資料を広げて発表のために討論をする学生や、視聴覚室で3、4人集まって映像に見入る者たちなど、利用の形態も様々である。案内して下さった次長さんのお話では日に3千人の利用者があり、試験前には6千人の入館者があるということであったが、図書館が大学の「知」の拠点となっていることがうかがえた。

大学が「知の広場」としての役割を果たすためには、まず人の集まる場を用意しなければならない。本学では学生の集まる場所が必ずしも十分ではなかった。今度工学部棟が一部改装になると聞いたので、この機会に旧教務課跡に広いラウンジ（多目的集会室）を設けることを提案したい。これは学生たちの談話や待ち合わせ、グループでの学習など広い用途に役立つものとしたい。学習院大学では学内中央に本部棟を立てた際に1階に広い学生用ラウンジを設け、1隅に購買部や喫茶コーナーを置いた。更に新しい建物を立てるときには1階に必ずラウンジを設け対話の場を用意するそうだ。2階には食堂を入れ、3、4階に事務部門や会議室を置いて、大学の中枢を集めるというのはいかがだろうか。

2）教育研究部門

大学は、教育・研究を通じて、個々の学生の人格・資質を伸長させるとともに、人類の歴史の中で生み出されてきた文明・文化という知的遺産を継承発展させる場であるが、大学の理念的なものに関してはすでに「高等教育のありかた」（「桐蔭論叢」第10号2003年6月）で論じたのでここでは具体的なカリキュラムについて私案を提示する。なおここで扱うのは全学生に共通の科目で、専門科目には触れない。

イ）アテーナイの学堂以来、大学は「知」の「饗宴の場」であることを目指してきたが現状はそれと程遠いものがある。学生が自と他を意識し、自他の間に対話を行うことに慣れていない。気質的に似通ったもの同志がすりよって仲間内の言葉やメールで共感の溜め息を交わし合うのでは「饗宴」は垣間見るこ

とさえ難しかろう。しかし大学であるからには一歩ずつでも「饗宴の場」に近付かねばなるまい。それには対話のために学生を鍛えなければならない。

まず個々の学生の能力を伸ばすために各学年に25人くらいのゼミナールを設ける。ゼミナールは、「饗宴」にもっとも近い授業形態である。現在ある1年生用のフレッシュマン・ゼミ（セミナ）や法律演習、卒業研究などはそれを活かすのがよいだろう。

1年生用のフレッシュマン・ゼミでは、情報の収集・分析・表現（口頭と文章）・発表に力を入れる。テーマは身の回りの問題から時事・社会・文化問題へと視野を広げていく。専任でゼミを担当していた頃には、自己紹介から始めて、自分の家（家族）、自分の学校、自分の町と相手の知らない事実を説明することから始めて、やがてある問題を捕らえて判断をする方向へと進んだ。

2年生ないしは4年生用のゼミとして

◇地域研究のゼミ（日本または外国の政治、経済、文化、習俗、宗教などやその国にある地域を対象にしたもので、担当者あるいは履修者の希望で範囲をきめる

例　青森県とキリスト教、アメリカ合衆国の政治の仕組み）

◇人を中心にしたゼミ（例　松下村塾の人達と明治維新）

私が行ったゼミでは建築家　安藤忠雄、指揮者　小沢征爾、小説家　大江健三郎の3人を取り上げ受講者を3つグループに分けて担当、発表させた。

◇社会で働く人々を対象とするゼミ

（人々が社会でどういう働き方をしているのかが学生にはよく分かっていない。大田区の町工場を見せたとき、そこで働く人のすがたに衝撃と感動を受けたという学生がいた。）

ロ）従来の3系列の一般教育科目の枠を広げて充実を図る。

①学問の基礎となる科目とその発展の科目

哲学――日本の思想、ヨーロッパの思想、イスラム教

歴史学――日本の近代史、2つの世界大戦

政治学――現代世界の情勢

経済学――資源と環境

科学の歩み――技術と人間

②世界に目を開くための科目

世界諸地域（アメリカ、ヨーロッパ、アジアなど）の社会と文化

語学（英語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、中国語など）

地球の科学（地球は生あるものの根源の場であり、資源・環境を含め、知識理解を深めるべき対象である）

③社会に目を向け、社会で生き抜くための力をつける科目

a）生涯計画論（キャリア・プラニング）「生涯設計」「就職」「職場」「一人暮らし」「恋愛」「結婚」「家庭」「出産・育児」「昇進」「転職」「教育」「地域との交流」「退職」「老後」

b）企業論、産業論（工場見学、企業研修を含む）

c）福祉の理論と実習

介護の理論と実習

ボランティアの理論と実習（国際交流協議会の大学生用プログラムなど）

④芸術や文化に目や耳を開く科目

日本の美術、世界の美術

ヨーロッパの音楽、日本の音楽、世界の音楽

文学（詩、小説、演劇、評論）、舞踊

⑤身体を鍛え、技能を身につける科目

体育実技、情報関係科目

トーフル、トーイックなどの準備科目

青山学院大学は2003年に「青山スタンダード」というプログラムを設定して学部の如何に係わらず、青山学院大学生全員にそのプログラムを履修させている。その狙いは専門科目の履修に入る前に青山の学生であるもの

がまず身につけるべきことを教え込もうというものである。私の目指すことの参考となるものなのでその概要を説明する。

その基本的な狙いは「これまでの学部教育において重要な位置を占めていた教養教育をさらに抜本的に改革して教養教育と専門教育のつながりをこれまで以上に密接にしたもので」「およそ青山学院大学の卒業生であれば、どの学部・学科を卒業したかに関わりなく一定の水準の技能・能力と一定の範囲の知識・教養をそなえているという社会的評価を受けることを到達目標とする」ものである。

その内容はまず1年生用の「フレッシャーズセミナー」を学びの心とスキル獲得のスプリングボードとし、キリスト教理解、人間理解、社会理解、自然理解、歴史理解の科目からなる教養コアと、言葉と身体、情報の技能を獲得する技能コアの上に様々な領域にわたるテーマ別科目を履修するようになっている。

国際基督教大学は開学以来教養学部制を取り、その中に人文科学、理学、語学、教育、国際関係の5学科がある。従って総学生数が少ない割に一般教育科目がバラエティに飛んでいる。さらに複数の教員が担当する総合科目が多くて、そのテーマも多岐にわたっている。例を挙げれば「文化と記号」「平和の諸問題」「欧州統合をめぐる諸問題」「アジア研究への招き」など、時事的国際的なテーマが多いのが特徴である。

こうした他大学の試みをも参考にしてさらに科目および内容の充実を図るべきである。

3）学生の生活指導部門

学生部長のときに学生部の基本活動計画を作った。実現した部分もあるがそうでない部分もある。当時学生部関係者のみに配布したのでここに掲げる。

学生部活動の基本計画

学生部では学生たちの生活面の指導のために基本計画を作りました。あらましは次のとおりです。

長期――基本計画に基づく企画とその実施
短期――日常的業務による秩序維持とサービス

学生に求める基本姿勢　1．自律性
2．他の尊重　3．全体への配慮

学生部の目標

「対話のある大学」づくり――対話は近代民主々義社会の基本をなすものである。従って大学内の学生同士、また教職員と学生との間に対話があることは当然であるが、もっと広く大学の外とも対話をする機会を作っていくつもりである。まわりの地域から横浜、首都圏、日本、世界と対話を広げていくということである。それがこの大学の特徴である少人数教育を具体的に生かすプランともなる。さらに社会に開かれた大学にもつながることになる。

「社会に向かって開かれた大学」をめざし、学生と社会人の交流をはかり、学生が社会と大学を出入りする中で意識の変改から生活の向上をはかる。

「対話のある大学」基本計画

A．対話で取り上げるべき内容

Ⅰ教科内（教員に対話のある教育を工夫してもらう）

Ⅱ教科外（学生部が中心となって行なう）

1）社会問題
①セクハラなどを含む男女間のありかた
②福祉問題を含む社会内の強者と弱者の問題
③周辺地域と環境の問題
④21世紀の社会構造

2）学内の問題
①教室内外での態度（私語、遅刻、居眠り、飲食）
②喫煙（健康への影響とマナー）
③駐車違反

3）個人のあり方

①思考と表現能力の開発
②勉学の仕方
③教養への指向
④生活態度（健康やアルバイトなど）
⑤服装などの外観が他人に与える印象
⑥外での行動の適不適と印象
⑦将来への眼差し

B．方法
Ⅰ各教科の授業の中で
Ⅱ通常の授業以外の場で
①フレッシュマン、ソフモア・ゼミの授業の中で
②オリエンテーションなどの際に
③木曜午後に講演などの集まりを行う（教養のための講座――大学内外の講師によるもの――イ．社会　ロ．国際　ハ．文学芸術　ホ．科学
④小集会――学内にそのための場を多く作る
⑤懇談会
⑥シンポジウム

その他
1）希望者のグループによる社会見学（裁判所、弁護士事務所、研究所、工場、横浜港、各種記念館など）
2）地域社会との交流
①社会人土曜講座
②地域の人の話を学生が聞く機会を作る
③ボランティア活動
3）卒業生へのアフター・サービス
①名簿作り
②在学生との交流の機会を設ける
③転職などの相談を受ける
④資格獲得のためのコース作り（税理士、社会保険労務士など）

4）卒業後の支援の部門

この部門はかつては担当する部署がはっきりしなかった。卒業後の生き方をサポートするキャリア情報センターが受け持つか、新しく担当をきめるかすべきだろう。

ここでの仕事の第1は同窓会をつくることだろう。同窓生（卒業生）は大学の宝である。大学創設２０年というのはいい機会である。今のうちに手を打たなければ卒業生は雲散霧消して組織化することが難しくなるだろう。まずは名簿をつくり、年1回総会を開き、卒業後20周年の会を準備し、3、4年生と卒業生の懇談会を設けることから始めてはいかがだろう。さらには資格獲得の為の支援や、一部の講義の再聴講など自らをリフレッシュする拠点にする。市ケ尾のセンターと合わせて地域の社会人と卒業生の社会人のための拠点となる生涯学習センターを充実させることが必要であろう。

5）学生の受け入れを担当する部門

少子化の傾向もあって受験生をいかに引きつけるかは難しい問題である。しかし進学率の伸びもあって、受験生の絶対数が激減しているわけではないので工夫が望まれる。1例としてかつて相模大野高校を訪問した際に、松原先生の指導で学生が書いた論文が桐蔭論叢に載ったのを持参して見せたところ、応対した進路指導の先生の態度が変わったことがある。聖セシリア学園に行ったときでもこういう指導をしてこういう結果が出ているというように、学生の成果を示せるように普段から用意をしておくと良いように思う。

以上学内に諸問題に関してかねがね思っていたことを述べた。桐蔭ルネッサスのための他山の石となれば幸いである。